

「滅ぼされた死」

コリント人への手紙第一

15 : 12 - 26

November.6.2022

コリント人への手紙15 : 12 - 26 (パウロ)

Preface

土浦めぐみ教会の主任牧師になって3年7ヶ月が経ちましたが、その間、30回程の葬儀を司式者として執り行わせていただきました。

そして、そのすべての葬儀の火葬前に読み上げた聖書の御言葉が、今読みました第一コリント15章の聖書箇所です。

この地上での歩みを全うした肉体は火葬に伏されるけれども、主イエスにあって与えられた永遠のいのちは、やがて朽ちることのない栄光の体をもたらし、召された方との天の御国での再開があることを覚えるために、この聖書箇所を読み続けてきました。

聖書は、私たちに復活があることを教えてくれます。

第一コリント15章は復活の章とも言われ、キリストの復活と死者の復活について述べています。

特に、キリストにあって死んだ者たちのことを「キリストにあって眠った者たち」と表現をします。

これは、主イエス様がかつて仰った「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです」という言葉の真意を的確に捉えた表現となります。

キリストにあって亡くなることは、真に生きることを意味します。

キリストにあってこの地上での死を迎えた者たちには、その死が死をもって終わるのではなく、よみがえりと復活を経験する契機となります。

またキリストにあっての死は、もうそれ以上死が、死としての効力を発揮することが出来ないということを、聖書は私たちに語り掛けてくれます。

どれだけ死が死としての効力を発揮できないのかと言いますと、使徒パウロが、このように言うほどにです。

ピリピ人への手紙1 : 20 - 25 (パウロ)

Part One

「私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。私の願いは、世を去

ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです」と言ってしまうほどに、使徒パウロは、「本当のところ、今すぐにでも死を迎え世を去りたいけれども、キリストを宣べ伝え、キリストにある復活に与る者たちが一人でも多く起こされるための神の道具としての使命を全うしたいだけです」と告白します。

決して、この世で生きることに意味を見出せないとか、死にたい願望のようなものではありません。

むしろ、この地上で生きることの意味が明確であり、この地上の限りある命が本当の、まことの命ではないという確信に溢れている告白です。

そして、この告白には、死に対する恐れがありません。

パウロにとっての死は、本当の命を、まことの命を、永遠のいのちを享受するための通過点に過ぎなくなっています。

もちろん、この地上で長年共にした人が亡くなることは、さみしいことでありますし、悲しく、辛いことですが、喜ばしいことでもあるというのが、キリストにある福音だと言うのです。

私が神学校の時、伝道師として働いていた教会のある女性長老の方が、突然召された教会員のご家族に向かって、優しいとても柔らかい笑顔で、「おめでとうございます。ついに天の御国へと凱旋されましたね」と語り掛けたところ、一瞬ご家族の顔がこわばりました。

が、すぐに「そうですね」と笑顔で返すようなことがありました。

その女性長老の言葉は、一見しますと、「なんて失礼な！」と思ってしまうような言葉だと受け止められるかもしれませんが、所謂「ご愁傷さまです。お気の毒に」と語りかける死に対して悲しみややるせなさしかない世界観では、中々受け入れられる言葉ではないかもしれませんが、聖書の語るキリストにある復活、天の御国、永遠のいのち、救いという教えに従うならば、また使徒パウロに倣うならば、至って真つ当な聖書信仰に則った言葉になるでしょう。

腰の曲がった老婦人であるにも関わらず、当時の私には、この女性長老が、一本筋の通ったキリっとしたキリスト者に思え、カッコよく見えました。

使徒パウロの「私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです」という告白は、キリストの福音を享受している者たちの共通の告白となるでしょう。

そして、この告白が私たちの実感となり、私たちの告白となるための時間が、私たちに与えられたこの地上での人生でありますし、また召天者記念礼拝の時

間なのかなと思わされます。

Part Two

私は、幼い頃から漠然とした死に対する恐れを持っていました。

そのことに気付いたのは、主イエス様に会い、イエス様を私の救い主として信じられるようになった時でした。

小さい頃から、「地獄に落ちないためにはどうすればいいんだろう？ 閻魔大王の前に立った時、地獄に落とされるのではなく、天国に行くように命じられるためにはどうすればいいのだろうか？ この友達にこんな意地悪をしてしまったけれども、地獄に落ちるきっかけになってしまわないように、その意地悪を帳消しにするために、今度は、こんないいことをしよう。これで、五分五分だから、いやちょっと良いことの方が勝っていると思うから大丈夫」というような思いと言いましょか、恐れのようなものが、いつも心のどこかにあったということ、イエス様に会った時、はっきりと気付かされました。

なぜ気付かされたのかと言いますと、主イエス様に会った時、「ああ、これで僕は、確実に天国に行ける者になった」という確信が与えられたからなんです。

その時、私がそれまで漠然と抱えていた罪悪感、罪意識、ころころ変わる善悪の基準、「悪いこととは何となくわかってはいたけれども、みんなやっているんだから大丈夫」と思っていたような行い等が、生まれながらの罪人であるためなんだということが、はっきりと分かってしまいました。

そして、その罪を主イエス様の十字架によって許されたということ信じられるようにされた者は、天の御国へと入れられるんだという何にも代え難い平安をはっきりと知ってしまったわけです。

それまで、日本昔ばなしや、仏教などの宗教観や、または何となく自分の内に形成されていた死生観などによって抱かされていた死に対する考えや恐れが、曖昧模糊としたものであって、不確かな死生観に惑わされていたということが、理解出来てしまったんです。

死が人にとって最も深刻な問題であること、また今あるこの世界の在り様が、人間の死への恐れに対する反応、またはもう少し突っ込んだ表現をしますと、死に対する悪あがき故に出来ている砂の上に建てた家のような世界であることを知ってしまいました。

新約聖書を始めから見ていきますと、主イエス様のお働きが記録されていますが、イエス様が2000年前に公生涯を始められた時、最初にこの世界に向かって発した言葉がどういう言葉か、ご存知でしょうか？

「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」という言葉なんです。

マタイの福音書4：17（パウロ）

主イエス様は、天の御国が本当にあることを告げ知らせるために、この世界に来られました。

そして、またイエス様が再びいらっしゃる時には、天の御国が、所謂物理的靈的に天にある御国というだけでなく、この地にもなるということを教えるために、天の御国について中々知ろうとしないこの世界に来られました。

天の御国の主であられる神なるお方が、人の姿をお取りになって、この砂の上の世界に来てくださいました。

そうして、砂の上ではなく、岩の上に建てられた堅固な家に例えられる天の御国に入ることこそが、人にとっての究極の救いであると、

また、この救いを確信して生きられることこそが、どんな境遇にあっても満足できる根拠になる事を教えて下さいました。

Part Three

先程、ピリピ書の「生きることはキリスト、死ぬことは益です」というパウロの告白を見ましたが、同じピリピ書で、天の御国に入ることの比類なき価値を知ってしまった使徒パウロの他の告白も見てみたいと思います。

ピリピ人への手紙4：11－14（パウロ）

ありとあらゆる苦難を通り、今もまた牢獄という苦難にあるパウロの口から出て来る言葉が、「満足」という言葉です。

なぜゆえに、そんな境遇にあっても「満足」というような言葉が出て来るのか？

天の御国が、すべての人にとって最も重要な栄冠であり、安息であり、富であり、幸いであるということを知識として知っているだけでなく、パウロ自身にとっても実感として、最も重要な栄冠であり、安息であり、富であり、救いであったからです。

崩れ行く砂の家に望みを置くのではなく、永遠に立つ岩の上に建てられた家に住まうという希望ゆえに、至って自然に口を突いて出てくる言葉でした。

人の満足は、どこに望みを置くのかによって左右されます。

もし、希望が砂の上に建てられたものに置くなれば、その満足は一過性のものであり、状況が変われば不満になり、不安になることでしょう。

でも、永遠に立つ岩、つまりキリストの上に建てられたものに希望を置くならば、境遇や状況に左右される満足ではない満足をその身に帯びることになるでしょう。

もちろん、辛い時には辛く、痛い時には痛いですが、それでもその辛さや痛みの中に満足することを学び、時に適って比類なき満足が伴うようになるでしょう。

ピリピ書の3章に行ってみましょう。

ピリピ人への手紙3：7-21（パウロ）

使徒パウロは、「それまで自分にとって得であったようなすべてのものが、キリストゆえに損と思えるようになった」と言います。

この告白は、私たちの告白でもあります。

パウロと同じように、私たちも自分にとって得であったようなすべてのものが、キリストゆえに損と思えるようになりました。

なぜならば、私たちの国籍は天にあるからです。

キリストとその復活の力を知った者とされたからです。

やがて朽ち果てるこの卑しいからだで終わる命ではなく、復活された主イエスと同じ栄光に輝くからだに変えられることを知っているから、すべての得であったようなものが、ちりあくたと思えるようになりました。

だからこそ何としてでも、その復活に達する者となるために、この今与えられているこの地上での命を、キリストのゆえに、キリストのために生き抜くのです。

キリストのために生き抜き、最後は殉教者となって亡くなる直前に書いた最後のパウロの手紙を見ますと、彼の一贯した天の御国への希望が描かれているのが分かります。

テモテへの手紙第二3：6-8（パウロ）

キリストにあって眠った者たちにはすべて、天の御国の義の栄冠が用意されています。

Conclusion

召天者記念礼拝は、先に召された者たちとの天の御国での再会を覚える時であると同時に、私たちが今、何のために生きているのかを再確認する時でもあります。

私自身、主イエス様が天の御国に入る唯一の門であられ、道であられるという事を信じられるようになってから、それまで抱えていた罪ゆえにどこに行ってしまうのか分からないという漠然とした恐れと、死に怯えながら生きることからの解放を経験しました。

そして、その経験は一過性のものではなく、今の私のすべてにずっと影響を与え続けている唯一の希望であり、生きる理由であり、牧師を、クリスチャンをやっている理由です。

神が人の死を誰よりも深刻に考え、悲しんでおられるという神の御心を一人でも多くの方々に知っていただくこと。

そうして神を知らない者から神を知る者へと変えられたならば、死がもうこれ以上恐れに値しないという確信をもって、ともに天の御国の栄冠を目指して、神と人を愛することを目標にこの命を生き抜く事。

このことを何としてでも全うし、死からの復活に皆さんと共に達したいと願っております。

最後に第一コリント 15 : 26 の御言葉を読んで終わりたいと思います。

コリント人への手紙第一 15 : 26 (パウロ)

お祈りいたします。

祝祷：エペソ書 3 : 20